旧約聖書に見られる *mšrr* としての歌い手

小 板 橋 又 久^{*}

ABSTRACT Matahisa KOITABASHI, *Singers as mšrr in the Old Testament*: We can find in the Old Testament *mšrr* “singer” and *šr* “singer” which both derive from the verb *šr* (*šyr) “to sing”. We can find *mšrr* only in Ezra, Nehemiah, and Chronicles. *Mšrr* occurs several times with the word “Levites”, and denotes a singer which belongs to the temple, especially to the Jerusalem Temple, except in Ezra 2: 65 and Neh. 7: 67, in which case we can’t determine the kind of singers. On the other hand *šr* does not occur in specific materials. From two examples (II Sam. 19: 36; Eccl. 2: 8) which denote the “palace singers” and four examples (I Kings 10: 12; II Chron. 9: 11; II Chron. 35: 25; Ps. 68: 26) where we can’t determine the kind of singers, we conclude that *šr* does not mean the specific type of singer but refers to a singer in general.

Why does the term *mšrr* occur only in the so-called Chronicler? Ezra, Nehemiah and Chronicles stress that there was one form in the songs and instrumental music dedicated to Yahweh which were performed in the Jerusalem Temple based on the true faith in Yahweh. The group that proclaimed that the traditional form was very important might use the term *mšrr* and distinguish it from the other terms which refer to the singers not based on the traditional form from their point of view.

はじめに

旧約聖書の中に現われる音楽活動の記事の中には、その音楽行為によって日の糧を得ていたと考えられる専門職としての楽人が現われる。旧約聖書資料を手掛かりにして、この一つの社会階層としての楽人像を描いてみる。これが筆者が取り組もうとする研究課題である。

この課題を果たすために本稿で特に注目したい用語は、ヘブル語の「歌う者達」を意味する *šrm*, *šrt*, *mšrrm*, *mšrrt* である。とりわけ、*mšrr* と *šr* という用語

* 東京都立清瀬東高等学校教諭

の間に何らかの用法の差があるのかどうかということに論点を絞りつつ、これら四つの用語に関する文献学的分析を通して資料から彼らについて歴史的にどんなことが描けるか。これが本稿の問題である。

I. 旧約聖書に現われる *šr*, *mšrr*

「歌い手」を表すと考えられる *šr* と *mšrr* が現われる箇所をまとめると表 1 になる。

表 1

<i>šr</i>	<i>mšrr</i>
サムエル記下19：36 列王記上10：12（歴代誌下9：11） 歴代誌下35：25 詩篇68：26 伝道の書2：8	歴代誌上6：18；9：33；15：16, 19 歴代誌下5：12, 13；20：21；35：15, 25 エズラ記2：41, 65, 70；7：7；10：24 ネヘミヤ記7：1, 22, 44, 67, 72；10：29, 40；11：22, 23；12：28, 29, 42, 45, 46, 47；13：5, 10

以下文脈を辿りながら、これらの *šr*, *mšrr* の用法について整理してみることにする。

a) ダビデ・ソロモンの宮廷付き歌い手

旧約聖書はダビデが才能のある楽人であり、詩人であったと伝えている。ダビデの堅琴を弾く腕前がサウルの宮廷に呼び寄せられるきっかけとなったし、ダビデが登りつめた出世街道の出発点にもなった（サムエル記上16：16-18, 23）。この記事から、王国成立以前に職業としているわけではないが楽器の演奏に秀でた者が多数いたということ、王国体制の成立と共に生まれた王宮に仕える宮廷楽師の姿を我々は読み取ることができるかもしれない。アブサロムの乱によってエルサレムを追われたダビデを、マハナイムにいたる間養った人物にバルジライという者がいる。王はこの恩義を返すべくこの者にエルサレムの王宮で廷臣として仕えるよう申し出るが、バルジライはこれを断った。年老いたバルジライがこの王の申し出を断ったときの言葉とは、齢八十の身では、もはや善悪の判断もつかないし、食べるものや飲むものを味わうことも、男女の歌い手の声を聞くこともできようか（サムエル記下19：36）というものであった。この言葉の中には、王の側近の生活が独特の方法でまとめてられている。すなわち、王の相談にのること、食べること、飲むこと、男女の歌い手の声を楽しむこと

である。食べること、飲むことと並んで、音楽は本質的に満たされた生活に属する⁽¹⁾と考えられている。ここで触れられている「男女の歌い手」(*šārīm wəšārôt*)とは、王を満たし、楽しませるために歌を聞かせた宮廷付きの歌い手であったと考えられる。ダビデの王宮には、おそらくそのような歌い手が数多くいたことであろう。

「私は私のために男女の歌い手を手に入れた」というコーヘレトの記事（伝道の書2：8）は、ソロモンの王宮の華やかさを暗示する記述の一部分をなしている。入手した数多くの財産の中に「男女の歌い手」(*šārīm wəšārôt*)が数えられているのは興味深い。財産目録の一部に挙げられているのは、彼らが主人に隷属しその身を束縛された地位にあったことをうかがわせる。言及されている男女の歌い手とは、多分その主人を楽しませた歌い手であったと文脈から推測できる。たとい、この記事がソロモンの王宮について述べていないとしても、古代イスラエル社会において王や富裕な者が自らの楽しみのためにそのような歌い手を持つことがあったことを、又そのような歌い手を持つことが自分の富や社会的地位を誇示することになったであろうことをそこから読み取ることができるかもしれない。

以上を見ると、ダビデ・ソロモンの宮廷付き歌い手を示す語として *mšr* ではなくて *šr* が使われていることがわかる。

b) 神殿付き歌い手

i) **ダビデの神殿音楽における音楽職務** 歴代誌記者は、イスラエルの神殿楽師の組織者としてダビデを位置づけている。ダビデによって契約の箱がエルサレムに運び入れられ安置された後、ダビデは主の家の歌をつかさどらせるために人を任命したという（歴代誌上6：16）。任命された歌い手 (*məšōrēr*)⁽²⁾として名前が挙がっているのが、ヘマン、アサフ、エタン（エドトン）であり、いずれもレビ人と位置づけられている（歴代誌上6：18-32）。ダビデによる契約の箱のエルサレム運び入れが、組織された永続的な神殿音楽が生まれる契機となったことは十分考えられる。ダビデはこの契約の箱のエルサレム搬入の際に、レビ人のつかさたち⁽³⁾に言い付けて同胞の者たちを歌い手達 (*məšōrērim*)⁽²⁾としてたたせたと歴代誌は語っている（歴代誌上15：16）。その歌い手達 (*məšōrērim*) の名前が17名挙げられている（歴代誌上15：19-21）。

ダビデの町に運び入れられた神の箱が天幕に安置されると、ダビデは主の箱

の前に仕える者達をレビ人の中から選んでおき、イスラエルの神、主を覚えて感謝し、ほめ賛えるようにした（歴代誌上16：4）。すなわち、神の箱が天幕に安置された後、その箱の前で楽器の演奏や歌を伴う厳粛な儀式が行なわれたのであった。選ばれたのは、契約の箱の搬入の際にも現われた人々で、頭はアサフ、それに継ぐ者はゼカルヤ、エイエル、シェミラモト、エヒエル、マティヤ、エリアブ、ベナヤ、オベド・エドム、エイエル。アサフはシンバル (*m^šiltayim*) を扱い、その他の者たちはネーベル (*nēbel*) と堅琴 (*kinnōr*) の使い手であった（歴代誌上16：5）。頭のアサフがシンバルの使い手であったというのは、その楽器によって歌い出す合図をおくったという意味があるのかもしれない。⁽³⁾

契約の箱のエルサレム搬入とその安置、そしてそれを祝う祝典が終わった後に、ダビデは契約の箱の前に毎日の日課として奉仕するためにアサフとその兄弟達をとどめておいた（歴代誌上6：37）。一方ダビデは、ギブオンの高き所にある主の住まいの前に祭司ツァドクを置き犠牲を捧げさせたが、彼らと共にヘマンとエドトン、そのほか名前で示された者で選ばれた者達を主をほめ賛えさせるために置いたという（歴代誌上16：39-41）。ダビデが老年を迎え、その子ソロモンを王とした後、イスラエルのつかさ、祭司、レビ人を集めた。その中に、ダビデが作った道具（楽器）をもって主を賛える者 (*m^šhal'ām*)、すなわち歌い手が4,000人いたという（歴代誌上23：5）。4,000人という数字をどう据えるか問題ではあるが、これらの歌い手の数は30才以上の者のみであったというから（歴代誌上23：3）、その年齢に達していない歌い手もいたということはいえるであろう。いずれにしても、このレビ人の人口調査（歴代誌上23：3-5）とは、将来建設するであろう神殿のための準備と見ることで⁽⁴⁾、その神殿に永続的に仕える者たちの中に歌い手が数えられていたのである。

調査した4,000人のレビ人の歌い手の中から、ダビデはアサフ、ヘマン、エドトンの子らを奉仕のために取り分けた（歴代誌上25：1）。選ばれた者たちは主に捧げる歌の訓練を受けた者達 (*m^šlum^šdē šīr layhwh*) で、皆よく理解をし、人に教えるほどの力量を持った者 (*mēbīn*) であって、彼らの数の合計は、288人であった（歴代誌上25：7）。これら288人の歌い手は、それぞれ12人からなる24のグループに分けられた。これらのグループは、一人のグループ・リーダーによって率いられており、そのリーダーとはいずれもアサフ、ヘマン、エドトンの子の名前として言及されている（歴代誌上25：9-31）。順番をめぐる

嫉妬や争いを避けるためにか、グループ分けはくじ引きによってとり行なわれた。彼らは下の者も上の者も、人に教えるほどの力量を持った者 (*mēbîn*) も未だ修業中の者 (*talmîd*) も、皆同じように任務のためにくじを引いた (歴代誌上 25:⁽⁵⁾ 8)。

この歌い手の組み分けを見るかぎり、主に歌を捧げる歌い手は一つの団体 (もしくはギルド) として組織化されている。彼らは皆、祭司や門衛と並んで公的な祭儀を取り行なう職員と見なされており、彼らの地位はダビデの任命に負うとされている。そしてアサフ、ヘマン、エドトンに特別な強調が置かれている。24の組分けにも、単にアサフ、ヘマン、エドトンの子の数の合計というだけでなく、奉仕をする際に都合のよい数であったのかもしれない。⁽⁶⁾ この歌い手の組分けは、その地位の起源をダビデに言及することでレビ人の歌い手の地位を保証しようとした一つの試みとは言えるであろうが、旧約聖書以外の資料で吟味できない現段階において、この組分けをそのままダビデ時代のものと結論付けることには依前として問題があると思う。

ダビデが組織した歌い手達 (*mēšōrîm*) はレビ人の一族の頭であって、各部屋にいて諸々の義務から自由にされていた (*ptrym*)。昼となく夜となく、彼らには務めがあったからである (歴代誌上 9: 33)。

以上を見ると、歴代誌はダビデをエルサレムの神殿音楽の組織者として位置づけその職務をかなり組織的に述べており、神殿付きの歌い手をレビ人が独占しているように記述している。ダビデの契約の箱のエルサレム運び入れが、組織された神殿音楽が生まれる契機となったことは十分考えられる。ダビデ自身が豎琴の名手で音楽に秀でていたという旧約聖書の伝承からすれば、ダビデがイスラエルの神殿音楽の組織化に手を染めたというのもまたありえたことである。しかし、ダビデが組織化したといわれる歌い手達は、歴代誌記述者がいうようにダビデの時代にレビ人の独占であったかどうか、もしくはレビ人と呼ばれていたかどうかはよくわからない。いずれにしても、ダビデが組織した神殿付きの歌い手を示す語として *mšrr* が用いられている。

ii) ダビデの伝統に基づいて行なわれた第一神殿の音楽職務 エルサレム神殿がソロモンによって建設されると、その神殿の中ではダビデが作り上げた神殿音楽の伝統が継承されたと歴代誌は記述している。エルサレム神殿の奉献式を華やかに彩ったのは、歌い手達 (*mēšōrîm*) であるレビ人全員、すなわち、

アサフ、ヘマン、エドトンや彼らの子、彼らの兄弟達が奏でる楽器や歌声であった（歴代誌下5：12）。ラッパを吹き鳴らす者と歌い手達（*mšōrārīm*）が一人であるかのように一つの声を聞かせ、主を賛美し、ほめ賛えた。ラッパ、シンバル、その他いろいろな歌の道具（楽器）を奏で声を上げ、「主は良きお方。その恵みはとこしえまで。」と主に向かって賛美すると、その家に関して、雲が主の家を満たした（歴代誌下5：13）。この時の楽器と歌声が一つであるかのように聞こえたのは、演奏者の腕前が良かったということの表現であるのかもしれない。⁽⁹⁾ ソロモンが祈りを終えると、諸々の犠牲が捧げられた。祭司達はその務めにしたがって立ち、レビ人は主の歌の道具（楽器）を持って立っていた。その時全イスラエルは起立していた（歴代誌下7：6）。

第一神殿の奉献式の記述は列王記にも現われるが（列王記上8）、歴代誌が述べているような歌い手の楽器の演奏や歌唱の記述は出てこない。しかし、この儀式の重要な要素として、礼拝、犠牲の奉納があったことは両者に共通している。詩篇などに見られるように、器楽奏、歌唱、踊りは神への重要な捧げ物であったことを考え合わせると、⁽¹⁰⁾ 歴代誌の記述どおりであったかどうかかわからないが、この重要な祝典に音楽は欠かせないものであったというのは推測できる。そして、この神殿奉献式の際に楽器を奏で歌を歌ったのは、ダビデが組織した神殿付きの歌い手達であったというのもありうることである。

ヨシャパテの治世に、ユダに攻めてくるアモン人、モアブ人に対する戦いの中で、王は民と相談して歌い手達（*mšōrārīm*）を任命した。彼らが武装した者達の前で「主に感謝せよ。その恵みはとこしえまで。」と歌うために（歴代誌下20：21）。彼らが喜びの声、賛美の声を上げ始めたとき、神はユダの敵に対して伏兵をおき、彼らは打ち負かされた（歴代誌下20：22）。歴代誌記述者はこの戦いを神の戦いとしており、歌い手達の歌声に合わせ神はユダの敵を打ち負かしたと記述している。この戦役に同行した歌い手達とは「主に向かって歌う者達（*mšōrārīm layhwh*）」であり、王国の国難にあって神に祈りの歌を捧げるという文脈からすると、歴代誌記述者がレビ人と位置づけている神殿の祭儀に携わった歌い手達であったと推測される。ヨシャパテの勝利の後、エルサレムへの凱旋行進でネーベルや堅琴などの演奏をしたのも（歴代誌下20：28）この神殿付きの歌い手達であったであろう。

ヒゼキヤがその治世中に行なった祭儀改革の中でも、歌い手達は重要な役割を演じた。ヒゼキヤは主の宮から汚れたものを取り出してきよめ、再奉献の儀

式をとり行なった。王はダビデ、ガド、ナタンの命令にしたがって、楽器（シンバル、ネーベル、堅琴）を携えたレビ人達を主の宮に立たせた（歴代誌下29：25）。ヒゼキヤの命令で全焼の犠牲が捧げ始められたとき、主の歌が始まり、ラッパがイスラエルの王ダビデの楽器と共に鳴り始めた（歴代誌下29：27）。会衆は総て伏し拝み、歌い手が歌い、ラッパを吹き鳴らした。⁽¹¹⁾これらは皆、全焼のいけにえが終るまで続いた（歴代誌下29：28）。犠牲の奉納の際に歌を歌っているのは、楽器を携えたレビ人と呼ばれている者達であり、歴代誌の他の箇所では歌い手（*mšōrēr*）とも呼ばれる者達であると考えられる。彼らが携えた楽器はダビデの楽器（歴代誌下29：26、27）⁽¹²⁾と呼ばれており、彼らが主の宮に立たされたのはダビデ、ガド、ナタンの命令にしたがってといわれ、彼らの文化がダビデの伝統に負っていることがここでも繰り返されている。

ヨシヤ王が行なった主の宮の修築の後に続く過ぎ越し祭の祝いの中でも、歌い手達は重要な役割を果たしたと思われる。アサフの子らである歌い手達（*mšōrārīm*）は、ダビデ、アサフ、ヘマン、エドトンの命令のとおり⁽¹³⁾にその職務についていた（歴代誌下35：15）。神殿やその制度、神殿での奉仕用の道具を再興しようとするヨシヤ王の情熱は、神殿音楽をもかつての姿に戻そうとする結果になったというのは考えられることである。音楽は神殿の務めの中でもかつてのような重要性を再び獲得したと思われる。歌い手達は、ダビデ、アサフ、ヘマン、エドトンの命令のとおり⁽¹³⁾に職務についていたといわれており、ここでもまたダビデの伝統によってヤーヴェ神殿の歌や器楽奏の奉仕がとり行なわれたことが繰り返されている。

以上のように、歴代誌はダビデの伝統に基づいて第一神殿の音楽職務がとり行なわれたと記述しており、その神殿に仕える歌い手を表す語として *mšr* が使用されている。

iii) 捕囚期後の神殿付き歌い手 バビロン捕囚を解かれツィオンに帰還したイスラエルの民のリストの中に、歌い手達（*mšōrārīm*）も数えられている。アサフの子孫だけが言及されており、その数はエズラ記では128人（エズラ記2：41）、ネヘミヤ記（ネヘミヤ記7：44）では148人となっている。どちらの数字にしても、歴代誌に出てくるダビデが組織したといわれる歌い手の人数291人よりも少ない（歴代誌上25）。歴代誌作家がおいた歌の奉仕に対する強調を考えれば、一層この数字は少ないと映るかもしれない。数はどれくらいか⁽¹³⁾

定かではないが、捕囚からの帰還民の中に歌い手がいたことは考えられ、彼らは帰還後自分達の元々の町に居住したらしい（エズラ記2：70；ネヘミヤ記7：72）。アルタシュタ王の第7年にエズラと共にエルサレムに帰還したイスラエルの民の中にも、歌い手達 (*mšōrîm*) は数えられている（エズラ記7：7）。また、異邦人の妻を離別するようエズラに強要された者のリストには、歌い手達 (*mšōrîm*) からエリアシブの名前が言及されている（エズラ記10：24）。ネヘミヤの律法遵守の誓約に加わった者達の中にも歌い手達 (*mšōrîm*) が現われる（ネヘミヤ記10：29）。これらの資料が語っているのは、バビロン捕囚後何回か続いたイスラエルの民のエルサレム帰還の波の中に歌い手が含まれていたということである。

第二神殿が再建されると、神殿奉仕も復活し、神殿音楽に従事する者達も再び任命されたと考えられる。エルサレムの城壁が再建され城門が立てられた後、門衛と並んで任命されたという「歌い手達 (*mšōrîm*) とレビ人達」（ネヘミヤ記7：1）は城壁の再建と直接どんな関係があるのかよくわからない。マイヤーズのいうように、神殿の門衛と城門の門衛との混同から、これらの語句はテクストの入り込んだのかもしれない。エルサレムに住んだレビ人の監督者としてウジの名前が挙がっており、彼は神の家の務めを任されたアサフの子らの歌い手達 (*mšōrîm*) の一人であったといわれている（ネヘミヤ記11：12）。昔から、ダビデとアサフの時代から、神に感謝と賛美を捧げる歌い手達 (*mšōrîm*) の頭がいたといわれるが（ネヘミヤ記12：46）、このウジとはそのような歌い手達の指導者であったと考えられる。歌い手達 (*mšōrîm*) には王の命令があり、日課が定められており（ネヘミヤ記11：23）、彼らはいろいろな奉納物が収められる神の宮の宝物倉の部屋に、祭司や門衛達と一緒にいたという（ネヘミヤ記10：40）。歌い手達 (*mšōrîm*) は、神の務め、浄めの務めをダビデとその子ソロモンの命令どおりに行なったという（ネヘミヤ記12：45）。

エルサレムの城壁の奉献の際に、歌い手達 (*mšōrîm*) がエルサレムの周辺の地方から、ネトファ人の村々から、さらにはベト・ギルガルやゲバとアズマベテの農地から集まってきた（ネヘミヤ記12：28-29）。というのも、歌い手達 (*mšōrîm*) はエルサレムの周辺に自分達のために村々を建てていたからである（ネヘミヤ記12：29）。歌い手達 (*mšōrîm*) は二手に分れて城壁の上に乗る、監督者イズラファの指揮で（歌や楽器の演奏を）聞かせた（ネヘミヤ記12：42）。以上を見ると、再建された城壁の奉献式の際に、エルサレム近傍の歌い手達が

駆りだされ、神への賛歌を捧げたい。このように、歌い手達は城壁の奉献式というような特別の祝典の際に、一方では第二神殿再建後は神殿の中で定期的に、歌や楽器の演奏を神に捧げるという務めを行なったと考えられる。エルサレムの城壁奉献式の際に見られたように、彼らの演奏技術には交互唱というものがあったと思われる。

歌い手達 (*mšōrîm*) はその務めに対する俸給を受けていた (ネヘミヤ記12: 47)。これらは特別の課税によりイスラエルの民から徴収した (ネヘミヤ記12: 47; 13: 5)。歌い手達の支給品は、神殿の庭の近所に位置していた特別の部屋に保管されていた (ネヘミヤ記10: 40; 13: 5)。以上の資料から、第二神殿で務めを果たした歌い手達には通常民から集めた手当てが支給されていたものと考えられる。⁽¹⁶⁾ トビヤのためにその手当てが支給されず、歌い手達 (*mšōrîm*) はそれぞれの農地に逃げ去ったという記事が出てくる (ネヘミヤ記13: 10)。この逃走がエルサレムで生活できずに仕方なく自分の農地に帰らざるをえなかったのか、それとも神殿の奉仕をめぐる祭司との間の闘争を背景としたストライキのためであったのかよくわからないが、少なくとも歌い手達にはそれぞれ世襲の所領が与えられていたと思われる。

以上のように、捕囚期後の第二神殿に仕えた歌い手を表す語として *mšr* が使われている。

このように、歴代誌、エズラ記、ネヘミヤ記の中で、神殿、とりわけエルサレムの神殿に仕える歌い手達を指す語として *mšr* が用いられていることがわかる。エルサレム神殿に仕えた歌い手達はダビデの伝統に従ってその職務をとり行なったといわれているが、この伝承から推測できることは、エルサレム神殿の中で真のヤーヴェ信仰に基づいてヤーヴェに捧げられる歌や器楽奏には、一つの形式があったということである。その一つの形式がいかなるものであったかは今のところよくわからない。ただし、資料から以下のようなごく断片的なことはうかがえる。レビ人である歌い手達が用いた楽器は堅琴、ネーベル、シンバルなど特定の楽器であった。詩篇の中で「私」で始まる詩文や「我々」で始まる詩文があることは、独唱で歌う場合と合唱隊による合唱という演奏様式があったことをある程度示している。また詩篇の詩文中に見られる「アーメン」「ハレルヤ」「ホシャナ」などのような賛美を表す表現や、「その恵みはとこしえまで」 (詩篇136) のような反復句などから、会衆が歌唱にかかわる場合があったことが考えられる。⁽¹⁸⁾ さらに、ネヘミヤ記に現われる城壁の奉献式の

記事に見られるように、二つの合唱隊による交互唱という演奏形式があったと思われる。

c) その他

今まで見てきた用例のほかに、その文脈からしてどういう歌い手であるか判断できない *šr*, *mšrr* がある。ソロモンがびやくだんの木材で作ったといわれる堅琴とネーベルは、歌い手達 (*šārīm*) のためであったが (列王記上10: 12; 歴代誌 9: 11), この歌い手達がどんな歌い手であったか文脈からは判然としなない。彼らの哀歌の中でヨシヤについて語ったという男女の歌い手達 (*šārīm wəšārôt*) (歴代誌35: 25) も、一体どういう歌い手達であるか判断しがたい。王宮で歌われたとするなら宮廷付きの歌い手であったかもしれないし、公的な儀式の場であるとするならば神殿付きの歌い手であったかもしれない。また、広く巷で愛唱されたというならば別の類の歌い手達かもしれない。「歌う者達 (*šārīm*) が先に立ち、弦を弾く者達 (*nōgʿnīm*) が後になり、その間にタンバリンを鳴らしておとめらが行く。」(詩篇68: 26) この行進は何らかの祝典を思わせるが、ここに現われる楽人達を必ずしも神殿付きの者達とは決められないであろう。バビロン捕囚から帰還した民の中に、レビ人ではない男女の歌い手達 (*məšōrʿrīm wəməšōrʿrôt*) が記録されており、その数はエズラ記では 200 人、ネヘミヤ記では 245 人となっている (エズラ記 2: 65; ネヘミヤ記 7: 67)。これらの男女の歌い手達についても、いかなる歌い手であるのかよくわからない。富裕者に雇われた世俗の歌い手とも、⁽¹⁹⁾レビ人ではない神殿付きの歌い手ともどちらとも受け取れる。しかし確かなことは、彼らは奴隷や家畜などの財産の一部として数えられていることである。このことから、これらの男女の歌い手達は誰かに従属しその身を束縛された地位にあったといえると思う。

II. 旧約聖書に見られる *mšrr* としての歌い手

šr と *mšrr* という二つの語はいずれも語源は *šyr であり、*šr* は Qal の分詞形、*mšrr* は Pōlēl の分詞形で、いずれも元々「歌うもの」を一般的に意味する。*mšrr* という語は、エズラ記・ネヘミヤ記・歴代誌以外には出てこない。この語はしばしばレビ人という語と一緒に現われ、そのほとんどが神殿、とりわけエルサレムの神殿に仕える歌い手を指している。文脈からは判断できない二つの例 (エズラ記 2: 65; ネヘミヤ記 7: 67) も、アサフの子孫として言及さ

れているレビ人の歌い手達の数の少なさ（エズラ記2：70では128人、ネヘミヤ記7：72では148人）を考慮すると、このレビ人でない歌い手達は神殿の儀式の中で合唱に従事したりして、レビ人の歌い手達の務めを補うような歌い手であったと考えられるかもしれない。一方、*šr* は特定の資料だけに現われるというのではなく、いろいろな資料に現われている。そして、宮廷付きの歌い手を表す二例（サムエル記下19：36；伝道の書2：8）の他、文脈から特定の職務を読み取れない四例（列王記10：12；歴代誌下9：11；35：25；詩篇68：26）からすると、この語が特定の職務を表すためにというよりは、広い意味で「歌い手」を表す語として用いられたと考えられる。

旧約聖書資料に見られる以上の事実をどう説明したらいいだろうか。*mšrr*, *šr* という二語とも古くから使われていたのであり、たまたま *mšrr* という語が現在残っている資料の中ではエズラ記・ネヘミヤ記・歴代誌という比較的後代の資料の中だけに残っているのだという説明も勿論できる。しかし、ここでは *mšrr* という語がいわゆる歴代誌歴史家以外に出てこない何か明確な理由があるのではないかと想定する立場にたってまず考えてみたい。

そうした場合次に考えられるのは、歴代誌記者が何らかの理由で *šr* と *mšrr* を使い分けていたのであり、エズラ・ネヘミヤ記で *šr* ではなく *mšrr* が用いられたのは方言の違いか文体的な違いであるということである。確かに、エズラ・ネヘミヤ記のテキストには捕囚期後のヘブル語の統語・構造上の特色があって、例えば *ky* に代わる *šr* の代用⁽²⁰⁾の例等を見れば、そういえないこともない。しかし、*mšrr* という語が歴代誌、エズラ・ネヘミヤ記以外の箇所に出てこないという点について、明確にできる別の説明をここでは考えてみたい。

残る可能性は、元々 *šr* があったが、その後何らかの理由で *mšrr* が使われるようになったという説明である。*šr* という語はウガリトの資料にも現われており⁽²¹⁾、古くから使われた「歌い手」を表す一般的な語である。一方、「歌い手」を意味する *mšrr* という形は、筆者が調べたかぎりでは現在のところ他の北西セム語の中に確かな例は見当たらない⁽²²⁾。よって、ヘブル語が *mšrr* という語を他のセム語から借用したというような説明よりも、ヘブル語の中で *šr* がありながら *mšrr* という語を後代使うようになった、といっておくのが現在のところはよいであろう。

では、何故 *šr* ではなく *mšrr* を使用するようになったのであろうか。その理由として、*šr* が表す意味が拡大した結果、特定のものを表せなくなり、ある特

定のものを表すために別の語が必要となったという説明ができる。すなわち、*šr* が広く一般的に歌い手を表す語として使われるようになって何か特定の歌い手を示す語として使われるには不都合となった結果、*mšrr* が用いられるようになったという説明である。これは一つの可能性として考えられるのではなからうか。この説明は、*mšrr* という語に関する文献学的な吟味によって得られた結果と結び付けて次のように説明できる。すなわち、エルサレム神殿の中で真のヤーヴェ信仰に基づいてヤーヴェに捧げられる歌や器楽奏には一つの形式があった。この一つの形式を大事な伝統と主張するグループが、この形式に基づいていないと考えた歌い手達と区別するために用いた用語が *mšrr* であったという説明である。

一つの形式を大事な伝統として重んじるグループが、この形式に基づいていないと考えた歌い手達と区別するために用いた用語が *mšrr* であったという説明は、*mšrr* という語が古くからある語でありながら現在残っている資料の中ではたまたま比較的后代の資料の歴代誌、エズラ・ネヘミヤ記以外で現われない⁽²³⁾ だけなのだ、という場合にも当てはまると思う。すなわち、*mšrr* という語の意味が縮小したのである。*mšrr* という語が古くは一般的な意味での「歌い手」を表していたのだが、歴代誌、エズラ・ネヘミヤ記の中では特別の意味を持つようになったわけである。そういう例が他にもある。例えば、*hālaq*「分ける」から派生した *maḥālōqet* という語は、「分けること、配分」を一般的に意味するが、歴代誌やネヘミヤ記の中では祭司やレビ人の組織に関する専門用語として使われている⁽²⁴⁾。*mšrr* という語もこの *mhlqt* の用例に近いのかもしれない。

おわりに

サウルの宮廷に呼び寄せられた堅琴の名手ダビデの記事から、王国成立以前に職業としていたわけではないが楽器の演奏に秀でた者が多数いたこと、王国体制の成立と共に生まれた王宮に仕える宮廷楽師の姿を我々は読み取ることができるかもしれない。また、ダビデやソロモンの宮廷に王を楽しませる男女の歌い手がいたことを示す記事が出てくる。ダビデやソロモンの宮廷に仕えた歌い手は *šr* と呼ばれている。

ダビデの契約の箱のエルサレム運び入れが、組織された永続的な神殿音楽が生まれる契機となったことは十分考えられる。歴代誌はエルサレムの神殿音楽の職務をかなり組織的に記述しており、レビ人が独占しているように記述して

いるが、事実そうであったかどうか定かではない。また、*mšrr* という語は歴代誌・エズラ記・ネヘミヤ記の中でのみ現われ、そのほとんどが神殿、とりわけエルサレム神殿に仕える歌い手を指している。エルサレム神殿の中で真のヤーヴェ信仰に基づいてヤーヴェに捧げられる歌や器楽奏には一つの形式があったが、この一つの形式を大事な伝統と認めるグループが、この形式に基づいていない歌い手達と区別するために用いた用語が *mšrr* あったといえるかもしれない。

略語表

BDB F. Brown, S. R. Driver and C. A. Briggs (eds.), *Hebrew and English Lexicon of the Old Testament*, 1953.

KTU M. Dietrich-O. Loretz-J. Sanmartin, *Die Keilalphabetischen Texte aus Ugarit*, 1976.

UF *Ugarit-Forschungen*.

UT C. H. Gordon, *Ugaritic Textbook*, 1965, 1967.

注

- (1) Pierre Casetti, “Functionen der Musik in der Bibel,” *Freiburg Zeitschrift für Philosophie und Speculative Theologie* 24 (1977), 382.
- (2) エタンの代わりにエドトンと出てくる箇所もある。歴代誌上25: 1, 6; 歴代誌下5: 12; 35: 15。
- (3) Alfred Sendrey, *Music in Ancient Israel* (New York: Philosophical Library, 1969), p. 77.
- (4) *Ibid.*, p. 78.
- (5) シュメールの社会には、神殿に属しいろいろな儀式の中で楽器を演奏したり歌を歌ったりする職務を持つ祭司として *gala* と *nar* がいた。*gala* と *nar* には、上下関係、序列、格の違いを思わせる *gala mah*, *gala*, *gala tur*, *nar gal*, *nar*, *nar tur* という区別があった。これらシュメール語の区別は、旧約聖書の *mēbîn* と *taḥmīd* の区別と同じるものがあるかもしれない。*gala* と *nar* については次の文献を参照した。Henrike Hartmann, *Die Musik der sumerischen Kultur* (Frankfurt am Main: Bildstelle der J. W. Goethe-Universität, 1960), pp. 129–158.
- (6) 一つのグループが一日の務め（朝，昼，夕方）を毎日交替で行なう。安息日には二つのグループによって一日の務めがとり行なわれる。よって，三週間に一度一つのグループの当番が回ってくる，とサンドリーは説明している。Sendrey, *op. cit.*, pp. 535–537.
- (7) Jacob M. Myers, *1Chronicles: A new Translation with Introduction and Comentary* (New York: Doubleday & Company, 1965; 1983), p. 171.
- (8) 第一神殿時代に神殿音楽に携わったのは，特定の聖職者階級ではなかった。もしこの礼拝式が専門家によってとり行なわれたとしても，レビ人に任されていたわけで

- はない。神殿音楽がレビ人の独占となったのは、捕囚期以後の時代においてであったとハランは述べている。Menahem Haran, *Temples and Temple Service in Ancient Israel* (Indiana: Eisenbrauns, 1985), p. 124, n. 21.
- (9) Sendrey, *op. cit.*, pp. 537-538.
- (10) 例えば、詩篇 104: 33-34; 69: 31f. を見よ。礼拝における音楽の位置については、次の研究がある。J. H. Eaton, “Music Place in Worship: A Contribution from the Psalm,” *Oudestamentische Studien* 23 (1984), 85-107.
- (11) 文字通りには「歌が歌い (*haššîr mšōrēr*)」であるが、内容としては歌い手が歌っていると考えられる。
- (12) 文字通りにはダビデの道具 (*k'lê dāwîd*)。ダビデには歌の道具 (*k'lê šîr*) を考案したという伝承がある (アモス書 6: 5)。ダビデ自身が見事に演奏した楽器とは *kinnôr* であったが、ダビデの道具が *kinnôr* の類の絃楽器を指しているかどうかは定かではない。レビ人が携えている楽器としてよく現われるのは *kinnôr*, *nēbel*, *mšiltayim* である。
- (13) Jacob M. Myers, *Ezra-Nehemiah* (New York: Doubleday & Company, 1965; 1983), p. 18.
- (14) レビ人の町は48あったという伝承がある (民数記35: 7; ヨシュア記21: 41)。
- (15) Myers, *Ezra-Nehemiah*, p. 141, notes vii 1. 七十人訳聖書においても門衛 (*pulōroi*), 歌い手 (*adontes*), レビ人 (*Leuitai*) が並記されて翻訳されている。ウガリト語で門衛と解されている *tgrm* は幾つかの行政・経済文書に現われる (*KTU* 4. 103: 39: 4: 126: 22; 4. 141: III: 2; 4. 609: 13)。 *ubdy* 文書の中では *tgrm* は *šrm* と並記されている (*KTU* 4. 103: 39)。
- (16) 歌い手に対する支給品に関する記録は古代近東世界に広く見られる。シュメール社会の音楽家に関する記録については次の文献に詳しい。Hartmann, *op. cit.*, pp. 120-183.
- (17) 支給分を奪われ、歌い手達はエルサレムにおいて自活できなくなり、町の外の居住地に引きこもらざるをえなかったという説明に、サンドリーは次のような論証でこれを祭司との間の権力闘争による歌い手達のストライキであるとしている。1. レビ人と歌い手がその町から近い彼らの所領から食料を定期的に支給されないということは考えられない。2. レビ人と歌い手に喜んでもてなしの手を差し出す富裕な市民が何人かいたであろう。3. 生活の糧を口実に音楽家は、神への奉仕をないがしろにはできなかったであろう。Sendrey, *op. cit.*, pp. 545-547.
- (18) Eaton, *op. cit.*, 94.
- (19) 捕囚の間の苦難を和らげるために必要であった喜びの歌を提供する世俗の歌い手であったとする説に対して、サンドリーはつぎのような根拠で神殿付きの歌い手であると反論している。1. その数が不釣り合いなほど多い。2. 捕囚期には今まで以上に礼拝音楽の重要性が高まったと考えられる。Sendrey, *op. cit.*, pp. 519-520.
- (20) Myers, *Ezra-Nehemiah*, pp. LXIII-LXIV.
- (21) 例えば, *KTU* 4. 126 (*UT* 169=1026): 11. ウガリト資料に現われる歌い手については、拙稿「ウガリト出土文書に現われる伶人」『オリエント』第28巻第1号 (1985年), 55-64ページを参照していただきたい。

- (22) ただし、ウガリト語の *mšr* (*KTU* 1. 3: III: 5; 1. 40: 9, 26, 35) を歌と取る立場がある。M. Dietrich-O. Loretz-J. Sanmartín, “Lexikalische und literarische Probleme in RS 1. 2=*CTA* 32 und RS 17. 100=*CTA* Appendice I,” *UF* 7 (1975), 150–151. 尚, *m*+語根からなる役職名の例としてウガリト語の *mšlm* 「シンバル奏者」がある。 *UT*, § 19. 2164.
- (23) 分詞形ではないが, *šyr の Pōlēl 形は他の箇所にも出てくる (ゼパニヤ書 2: 14; ヨブ記 36: 24)。そこで *šyr の Pōlēl 形は, 人が歌う (ヨブ記 36: 24), 鳥が歌う (ゼパニヤ書 2: 14) 文脈で現われている。
- (24) *BDB*, pp. 324–325.